

提出された博士学位請求論文 *Social Capital and Armed Conflict in Somalia* (邦題: ソーシャル・キャピタルと武力紛争: ソマリアを事例として) は、1991年に中央政権が崩壊したソマリアにおける紛争を、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)の理論を用いて検証し、その紛争の結果どのようなソーシャル・キャピタルの変化につながったのかを解明しようとしたきわめて意欲的な論文である。国連職員としての立場を十分に活用し、世界で最も危険な国とも位置づけられたソマリア国内での調査を踏まえており、世界的に見てもきわめて希少な研究成果として評価できるものである。

本論文は、全5章から構成され、本論(参考文献を含む)と付属資料からなる。その中で、ソマリアの五つの都市における暴力とソーシャル・キャピタルの分散を定量的に分析するとともに、その中の三つの都市に関しては定性的な分析が行われている。本論文におけるリサーチ・クエスションは、ソーシャル・キャピタルは武力紛争を助長するか、それとも緩和するか、あるいは、武力紛争はソーシャル・キャピタルに影響を与えるか、もし与えるならば、どのように与えるか、というものである。この問いに答えるために、各章では以下のような検討が行われる。

第一章では、本論文の課題と概要が述べられる。ソーシャル・キャピタルと武力紛争に関する先行研究のレビュー後、方法論が紹介される。本研究では、ソマリアの三つの都市(ブラオ、モガディシュ、ガルカイヨ)に関する詳細な定性的分析と、二次データのロジスティック回帰分析を行うとともに、研究計画が提示される。

第二章では、本研究の分析枠組と仮説、および関連する理論的予測が提示される。そのために、ソマリアの略史と武力紛争の「根本的原因」が概説され、独立変数と従属変数が説明される。ここでの分析枠組として用いられるソーシャル・キャピタルの尺度として、「集団および集団ネットワーク (groups and group networks)」「個人的ネットワーク (personal networks)」「信頼 (trust)」「社会的結合と包摂 (social cohesion and inclusion)」「アイデンティティ (identity)」「コミュニティのリーダーシップ (community leadership)」が挙げられる。これらの尺度を用いることで、定性的および定量的分析において、「結束的」「連携的」「連結的」ソーシャル・キャピタルを概念上区別し、各ソーシャル・キャピタルが武力紛争にもつ影響を分析する視座が示されることになる。ここで以下の仮説と予測が提示される。

【仮説①】 連携的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に負の影響を与える。

【仮説②】 結束的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に正の影響を与える。

【仮説③】 強制的な連結的ソーシャル・キャピタル(hard linking social capital) は武力紛争に

正の影響を与える。

【仮説④】非強制的な連結的ソーシャル・キャピタル(soft linking social capital) は武力紛争に負の影響を与える。

また、ソマリアの五つの都市に対する理論的予測は次の通りである。

【予測①】ボサソとブラオは、モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドに比べて、連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。

【予測②】モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドは、ボサソとブラオに比べて、結束的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。

【予測③】モガディシュは、他の四つの都市に比べて、強制的な連結的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。

【予測④】ブラオとボサソは、モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドに比べて、非強制的な連結的ソーシャル・キャピタルの度合いが高い。

第三章では、記述統計学および推測統計学を用いて、二次データの大標本セットの定量的分析が行われる。前述の分析枠組に基づき、国家単位（各都市の集計）および都市単位におけるソーシャル・キャピタルと武力紛争の関係をロジスティック回帰分析にかけている。また、定性的分析を行うために三つの都市（ブラオ、モガディシュ、ガルカイヨ）に関する判別分析を行っている。そして最後に、仮説および理論的予測に対する定量的分析の結果の比較がなされる。結論としては、仮説③および仮説④と（部分的ではあるが）理論的予測①のみが立証された。

第四章では、ソーシャル・キャピタルと武力紛争の定性的分析を行っている。ブラオ、モガディシュ、ガルカイヨにおけるフィールドワークを通して収集した二次データおよび一次データを用い、これら三都市の背景、紛争状況を確認した後、各都市における六つのソーシャル・キャピタル尺度が分析される。最後に、前述の理論的予測に対する定性的分析の結果を比較している。分析の結果、理論的予測①のみが立証された。

第五章では、これまでの結果を要約した上で結論を導いている。定性的分析と定量的分析の両方の結果から、仮説①と仮説③が立証された。すなわち、連携的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に負の影響を与え、強制的な連結的ソーシャル・キャピタルは武力紛争に正の影響を与えるということである。四つの理論的予測に関しては、予測①のみが立証された。つまり、ボサソとブラオは、モガディシュ、ガルカイヨ、ラス・アノドに比べて、連携的ソーシャル・キャピタルの度合いが高かった、ということである。この結果を踏まえ、ソマリアのように長期化した武力紛争を分析する際、ソーシャル・キャピタル理論を用いることが有益だということが示される。そして、政策的インプリケーションとしては、市民社会団体による連携的ソーシャル・キャピタルの発展には限界があり、国家による連携的ソーシャル・キャピタル構築の重要性が提起されている。

本論文は以下のような点できわめて大きな貢献が見られる。第一に、ソマリアというきわめて不安定な政治状況の下で集められたデータを、実務家としての体験に基づき、あくまでもソーシャル・キャピタルという分析枠組みに徹し、単に定性的な研究ではなく、定量的な分析を加味する形で、ソーシャル・キャピタルと紛争の関係を追求してより一般的な議論につなげようとしている点である。データ上の制約はあるものの、用いられている計量分析は十分な水準の研究であると評価された。第二に、人間の安全保障プログラムの博士論文として、上記の研究を実施するにあたっての国連職員という実務家としての感覚がきわめて有効に作用したことが看取される点である。こうした成果は、プログラムの趣旨ともきわめて整合的なものであった点である。第三に、ソマリア研究の観点からも、1991年の政権崩壊以降、様々な逸話(anecdotes)をまとめた研究はあるものの、5つの都市における紛争の特徴をソーシャル・キャピタルという観点からとらえ直した体系的な研究は初めて実施されたもので、きわめてオリジナルな研究である点である。

ただし、本論文にも問題がないわけではない。分析枠組、分析概念として必ずしも熟しているとは言えないソーシャル・キャピタルの議論を用いているため、その分析を都市という単位で適用する妥当性がどの程度認められるのかという点や、強制的な連結的ソーシャル・キャピタルの例として分析されている警察は、その選択自体が果たして妥当なのかといった点について方法的な疑問が提示された。

しかし、こうした指摘は今後の方法論上の課題を示すものであり、本論文の価値を損なうものではない。したがって、本審査委員会は博士(国際貢献)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。